

修士論文要旨

研究テーマ：認知機能低下を有する高齢の腰椎椎体骨折患者に対する作業療法の意義に関する研究

学籍番号 m 1 6 7 0 0 1 7

氏 名 加 藤 美 樹

研究指導教員 江 西 一 成

概 要

【目的】

本研究の目的は認知機能低下が腰椎椎体骨折患者の回復に与える影響を検討することと、独居患者の帰結に対する影響因子を分析することである。

【研究 1】

対象：平成 29 年 7 月 30 日～平成 30 年 9 月 30 日に、東海記念病院に入院し退院に至った腰椎椎体骨折患者のうち、包含基準(女性, 75 歳以上, 保存治療)を満たした 69 名。

方法：入・退院時の身体・認知機能, ADL 自立度(以下, FIM), 年齢, MMSE 得点, 認知症高齢者の日常生活自立度判定基準, 老研式活動能標, 離床までの日数, 既存骨折の有無, 退院先についてデータ収集した。

分析は, MMSE と日常生活自立度判定基準で分類した認知機能低下群(n=30 名), 健常群(n=36 名)の 2 群間で入退院時の測定値および自宅復帰率を比較した。

結果：認知機能低下群は既存骨折が多く, 受傷前の I A D L が低値だった。

さらに認知機能低下群は疼痛, 注意, 抑うつ改善が有意に低かった。FIM は認知機能低下群の退院時が低く, FIM 利得も低値にとどまった。自宅退院率は健常群の 84%に対し認知機能低下群は 46%と低かった。

【研究 2】

対象：研究 1 の対象者のうち, 入院前に独居だった 45 名。

方法：退院時の身体・認知機能のデータに加え ADL・IADL 能力(以下, AMPS) Lubben Social Network Score 6 日本語版(以下, LSNS 6)を実施した。分析は独居群(n=24 名), その他群(n=21 名)の 2 群間で測定値を比較後, 独居を目的変数としたロジスティック回帰分析を実施した。

単変量解析の結果, 独居群はバランス, AMPS のプロセス技能が高値だった。

さらに心理的に健康で LSNS6 の値が高値だった。ロジスティック回帰分析の結果, 抑うつ(OR 0.63 95%CI 0.451 - 0.891 P=)LSNS 6(OR 1.32 95%CI 1.035 - 1.703)が選択された

【結論】

本研究の結果から, 作業療法士が高齢女性の腰椎椎体骨折患者に介入する際に

は、運動機能向上だけでなく、疼痛管理や心理面への介入が必要である。
また、独居退院を支援するには ADL・IADL を安全に遂行できるよう環境調整
をすることや心理面への対応、退院後のソーシャルネットワーク構築への助言
等が有効であると考えられた。